

Title	11.障害者のインターネット利用
Author(s)	馬場, 寿実 佐々木, 宗雅
Citation	聖学院大学図書館情報学研究, 第6号 寄附講座「インターネット時代の情報資源活用」特集号, 2011.3 : 114-116
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3350
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

11 障害者のインターネット利用

馬場 寿実・佐々木 宗雅

概要

現在、障害者もインターネットが使えるための支援技術の環境が整ってきていることもあり、多くの障害者が一般の人々と同じように、インターネットを活用する機会が増してきている。特に、視覚障害者においては点字ディスプレイや、音声読み上げソフトの活用により、今までは点字資料、カセットテープ、対面朗読を中心としたアナログ的な手段でしか情報を得ることが出来なかったが、インターネットを活用できるようになり、いつでもどこでも自力で欲しい情報を得ることが出来るようになった。また、メールやBlogなどで情報を発信することも出来るようになった。聴覚障害者もネットで流れる映像コンテンツに字幕が付与されるなどの配慮があれば、リアルに映像からの情報を得ることが出来る。自分の感情を上手く表現できない自閉症や、発話が上手く出来ない障害者などにおいても、持ち歩きできる手軽な携帯やスマートフォンのアプリケーションや機能を活用することで、コミュニケーションのバリアを軽減できる。更に生活の行動範囲においても、例えば四肢に障害があり買い物が不自由だったりする障害者などは、ネットショッピングで自由に買い物が出来るようになり、他人に頼ることなく行動できる範囲が広がった。

このように、インターネットは障害者の障害のバリアを軽減し社会参加・自立へ大きな役割を果たしている。そのインターネットを障害者も含め、だれもがアクセス可能で便利に使えるようにためには、今後は更なる支援技術の発達は当然のことながら、ウェブコンテンツのアクセシビリティ、また障害者が電子機器を使い始めるスタート時の設定や教育、トラブルが起こった時など支援

をする体制は欠かせない。国によって差はあるが、法律や規格などによりアクセシビリティを配慮していくよう決まりがあるので、ぜひ、情報を発信する側や関係者はそういった知識を身につけ、実行に移して欲しい。

<h3>障害者のインターネット利用</h3> <p>2010年12月17日 インターネット時代の情報資源活用 (聖学院大学)</p> <p>NPO法人ハーモニー・アイ:馬場寿実</p>	<h3>国内の障害者の現状</h3> <p>(1級から6級の障害者)</p> <table border="0"> <tr> <td>身体障害児・者</td> <td>366.3万人(29人)</td> </tr> <tr> <td>知的障害児・者</td> <td>54.7万人(4人)</td> </tr> <tr> <td>精神障害児・者</td> <td>302.8万人(24人)</td> </tr> <tr> <td>※()内は人口1000人に対する割合</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">全体</td> <td style="text-align: center;">約734万人</td> </tr> </table>	身体障害児・者	366.3万人(29人)	知的障害児・者	54.7万人(4人)	精神障害児・者	302.8万人(24人)	※()内は人口1000人に対する割合		全体	約734万人
身体障害児・者	366.3万人(29人)										
知的障害児・者	54.7万人(4人)										
精神障害児・者	302.8万人(24人)										
※()内は人口1000人に対する割合											
全体	約734万人										

1

2

<h3>総人口からみる割合</h3> <p>国内総人口・約1億2700万人</p> <p>国内人口の5.7パーセント</p> <p>世界全体では、約15パーセントが障害者</p> <p>★障害者数は年々増える傾向にある。</p>	<h3>各身体障害の人口(18歳以上)</h3> <table border="0"> <tr> <td>視覚障害者</td> <td>約31万人</td> </tr> <tr> <td>聴覚、言語障害者</td> <td>約34万人</td> </tr> <tr> <td>肢体不自由</td> <td>約176万人</td> </tr> <tr> <td>内部障害</td> <td>約1万人</td> </tr> </table>	視覚障害者	約31万人	聴覚、言語障害者	約34万人	肢体不自由	約176万人	内部障害	約1万人
視覚障害者	約31万人								
聴覚、言語障害者	約34万人								
肢体不自由	約176万人								
内部障害	約1万人								

3

4

<h3>障害者のインターネット利用の調査から</h3> <p>※東京都内の16歳以上49歳以下の障がい者男女を対象に各障がい者団体の協力のもと、総務省によって行われた。調査は平成14年3月に実施、有効回答数は789件。</p> <table border="0"> <tr> <td>視覚障害者</td> <td>69.7%</td> </tr> <tr> <td>聴覚障害者</td> <td>81.1%</td> </tr> <tr> <td>肢体不自由</td> <td>43.6%</td> </tr> <tr> <td>全体では、29.2%</td> <td></td> </tr> </table> <p>視覚障害者と聴覚障害者の割合が圧倒的に高い</p>	視覚障害者	69.7%	聴覚障害者	81.1%	肢体不自由	43.6%	全体では、29.2%		<h3>視覚障害者のパソコン、インターネット、携帯電話利用状況</h3> <p>※有効回答者数413人 (調査の回答方法:メール版:322人、点字版:31人、拡大版:24人、筑波技術大36人(点字版9人、拡大版27人))</p> <table border="0"> <tr> <td>携帯電話の利用者数</td> <td>92%</td> </tr> <tr> <td>パソコンの利用者数</td> <td>95%</td> </tr> <tr> <td>インターネットの利用者数 (パソコンからインターネットを利用してる人)</td> <td>93%</td> </tr> </table>	携帯電話の利用者数	92%	パソコンの利用者数	95%	インターネットの利用者数 (パソコンからインターネットを利用してる人)	93%
視覚障害者	69.7%														
聴覚障害者	81.1%														
肢体不自由	43.6%														
全体では、29.2%															
携帯電話の利用者数	92%														
パソコンの利用者数	95%														
インターネットの利用者数 (パソコンからインターネットを利用してる人)	93%														

5

6

だれもがインターネットにアクセスし使えるようにするための、法律や規格について

■アメリカの例

リハビリテーション法508条(米国の連邦政府の調達基準に関する法律)により、連邦政府が購入するIT機器やソフトは、障害者に使えるものでなければならないという規則がある。

そのほか、ウェブのアクセシビリティに関する標準を決める規格としてW3C(World Wide Web Consortium)の中に、WAI(Web Accessibility initiative)という組織があり、標準化しアクセシビリティの促進を図っている。

7

国内では・・・

障害者基本法でも、現在、情報の保障について詳しく詰めているほか、工業基準「JIS X8341」のシリーズもある。

「情報通信における機器、ソフトウェアおよびサービスの情報アクセシビリティを確保・向上するために、企画・開発・設計者および経営者が配慮すべき具体的な要件がまとめられた標準規格。

情報アクセシビリティとして、高齢者・障がい者等が、情報通信における機器、ソフトウェアおよびこれらによって実現されるサービスを支障なく操作または利用できるように配慮することが求められている。

特にその中で、「JIS X8341-3(ウェブのアクセシビリティ)」で、ウェブのアクセシビリティについての、規格が書かれている。

8

障害者にとっては、IT機器やネットは強い味方！

使える人、使えない人に大きな情報格差が生まれている。自立、生活のクオリティにも影響する。

実際の障害者のインターネット利用についてのビデオを見てみましょう。

<http://oalp.org/video/category/physical/>

9

インターネットは、出来なかった事を、出来るように変える可能性を持っている。

多様な利用者を想定し、アクセシビリティへ配慮したものであって欲しいと思う。

10

最近のアクセシブルなIT機器やネット活用の支援技術の例

携帯(ドコモのらくらくホン)・・・音声でも操作可能

iphone、ipad・・・・・・・拡大や音声、TV電話など、幅広くだれもが使える配慮(アクセシビリティ機能)を、最初から実装している。

・モバイル型遠隔情報保障システム
スマートフォンを使い、講演者の講演内容をネットを通して飛ばし、その内容を遠方のスタッフが聴き、テキストに起こす。そのテキストデータを、会場に参加している聴覚障害者が、ネットを通して見ることができる。(ソフトモバイルや大学などの連携の研究)

<http://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/mobile1/index.html>

11